
学校臨床の新展開

— ⑩誰のニーズか —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

子どものニーズをみつめて

昨年末、『子どものニーズをみつめる児童養護施設のあゆみ～つばさ園のジェネラリスト・ソーシャルワークに基づく支援～』

(ミネルヴァ書房、2013年)が発刊されました。これは、京都の児童養護施設つばさ園の前園長である大江ひろみ氏、現園長の石塚かおる氏、そして長年、つばさ園のケースカンファレンスにかかわっておられるソーシャルワーク研究者の山辺朗子氏がまとめられたものです。

現在、私は、大学での対人援助専門職養成のほか、スクールソーシャルワーカーとして自身も現場に出向くこともあります。このマガジンでは「学校臨床の新展開」などと大げさなタイトルをつけるものの、日々どうすれば教育と福祉の連携や協働がうまくいくのか模索している段階です。そのよ

うななか、この本は、「あらたて聞くけど君はどっちをむいて仕事をしているの？」と自問自答する契機を私に与えてくれたような気がします。つまり、子どものニーズをしっかりと見つめているかと。

つばさ園の実践から学ぶこと

つばさ園の実践の特徴は、本書で山辺氏が記すように、「子どもの主体的権利の擁護と民主主義を基盤とした生活支援、話し合いの重視、暴力否定」です。大江ひろみ前園長が施設長となった1984年当時、つばさ園では暴力がはびこっており、安心して子どもたちが生活できる環境ではなかったといいます。日々繰り返される児童間のいじめ、リンチ。これに加え職員からの激しい体罰もあったようです。しかし、つばさ園は大江ひろみらの尽力に

より、次第に暴力的な状況から脱し変革しようとする動がおき、現在では完全に暴力を拒否する体制へと移行しています。子どもも職員も暴力は禁止。職員は子どもたちの思いを丁寧に聞く。困ったことがあったら話し合いをすること。大江ひろみ氏は、そのプロセスを「職員が何かを自分のためにしてくれるということ、子どもは『何かをしたい』という気持ちが出てきます。このような経験を重ねることで、暴力を使わない気持ちの収め方ができるようになっていったと思います。」と語っています。子どものニーズに焦点をあてる実践の原点がここにあるのだと思います。暴れる子どもと日々向き合い「暴力はアカン」でも「あなたは大切や」と語り、職員には「子どもを責めたらアカン」というメッセージを出し続けられました。

また、つばさ園では、どの施設も入所を断るような支援が難しいと思われる子どもや、中卒、高校中退した子どもも可能な限り受けいれておられます。まさに「最後の砦」ですが、そこには「どんな子も引き受ける」という大江ひろみ氏の信念があります。

石塚氏は、無断外泊を繰り返し、いつ帰ってくるかわからない子どもに不安をかかえながらも信じ待ち続け、毎日毎日布団を干し続けるしかなかったといいます。しかし、そんな実践があったからこそ、子どもは安心基地のようにつばさ園に帰ってくるができるのだと思います。子どもたち

の思いを丁寧に聞き、そのあるがままを受け容れること、信じて待つこと、語ること、そして子どもたちの置かれた状況や背景を丁寧に理解し、共感することを生活全般のなかで展開しています。



日本は欧米と比べ長年、施設におけるケアが社会的養護の中心を担っています。しかし、多くの施設ではそのケアの根拠となる理論や方法が十分に蓄積されておらず、残念ながら現在も勘と経験のみに基づいたケアが行われていることが少なくありません。そして、依然として「暴力」が深刻な問題であり続けています。また、18歳までという期間限定の入所は猶予なく子どもたちに「自立」を迫り、職員も焦ります。困難な子どもたちを引き受け、ケアや自立支援を行うには社会的養護専門職としての基盤と専門性が不可欠です。そこで、つばさ園ではジェネラリスト・ソーシャルワークを理論的、方法論的基盤に据え、支援を展開しています。子どもたちを「問題児」としてとらえるネガティブな視点ではなく、このような状況の中におかれていたがために、このような「問題」を出さざるを得ない子どもであると解し、ストレングスに焦点をあて支援をデザインしているのです。支援者のニーズを最優先するのではなく、丁寧にかつ総合的にアセスメントをすることにより子どものニーズを明確化し支援の方向性を明らかにしています。

つばさ園での実践は学校現場での子ども理解に応用すべき点が多いと感じます。学校教員は勉強を、施設職員は生活と自立支援を主として担うわけですが、第一に大人側のニーズを子どもに押し付けるのではなく、困難な子どもであればあるほど子どもの

おかれた状況やこれまでの育ちを踏まえ、現にこの子どもが必要としていることは何かを把握していくことが求められます。

配置型スクールソーシャルワーカーが配置される学校は主としていわゆる「指導」困難校です。しかし、教員の指導が困難であるという大人の側の難しさの前に、困難な背景を生きる子どもたちの困難さにこそ共感し、ニーズをみつめる支援が求められるのだと思います。さまざまな問題行動を呈する子どもが学校や施設の間では日常的に見られます。「子どもを責めたらアカン」大江ひろみ氏の声が聞こえてきます。